

河辺正三（ビルマ方面軍司令官）の 「前史」について

武島 良成

The Early History of Kawabe Masakazu, Commander of the Japanese Burma Area Army

Yoshinari TAKESHIMA

Accepted June 19, 2019

抄録：本稿は、ビルマ方面軍司令官として、「独立」したビルマ国への譲歩的政策の浸透に務めた河辺正三の、「前史」を検討するものである。河辺は、元々アジア政略への関心が薄く、日中戦争の拡大にも反対していた。河辺の世界観は、大亜細亜協会のものとは隔たっており、アジア連邦の結成にも積極的ではなかった。このような河辺にとって、1942年末以後の「新政策」は、受け入れやすいものだった。河辺は陸軍内で主流的な存在であり、その考え・行動は、決して特殊なものではなかった。

索引語：河辺正三，太平洋戦争，ビルマ，東条英機，大亜細亜協会

Abstract: This paper examines the early history of the commander of the Japanese Burma Area Army, General Kawabe Masakazu, who tried to make a policy of concessions to “independent” Burma. From the start, Kawabe was not interested in a political stratagem for Asia, and he was also against the expansion of the Second Sino-Japanese War. Kawabe's world view was different from that of the Dai Asia Kyokai, and he was not a proponent of the formation of the Asian Federation. “The new policy” agreed at the end of 1942 was acceptable to Kawabe who harbored similar ideas. Kawabe represented the mainstream inside the army; therefore, his ideas and actions were by no means unusual.

Key Words: Kawabe Masakazu, The Pacific War, Burma, Tojo Hideki, Dai Asia Kyokai

1. はじめに

本稿は、ビルマ方面軍司令官として、「独立」したビルマ国への譲歩的政策の浸透に務めた河辺正三中将（1945年3月に大将）の、「前史」（ビルマに赴任するまでの歩み）を検討し叙述するものである。

ビルマでの河辺の役割の重要性については、いくつかの論文で触れてきた〔武島 2014; 2016a; 2016b; 2018a〕。河辺は、現地住民の自主・自立に配慮する「新政策」の担い手として、東条英機大将（首相・陸相を兼任）に白羽の矢を立てられ、ビルマに派遣された。その際、どの程度自主・自立を認めるか、匙加減を任された。同地の「新政策」は、「大東亜共栄圏」における新規「独立」のパイロット・ケース（先導的取り組み）であり、他の場所にも適用されるはずだった。つまり、河辺の施策は、以後の先例となる重要なものだった。

このような政策を担った河辺だが、その歩みは体系的に分析されていない。河辺に触れた著作のほとんどは、盧溝橋事件やインパール作戦での振る舞いを切り取った論評に過ぎない¹⁾。そして、例えば、作家の半藤一利などは、ビルマ時代の河辺を、「反東条派として睨まれ、優等卒でありながら同じ同期生のなかで、かれの大将進級はいちばん最後まで放っておかれる、という弱い状況下にあったのである」と述べている〔半藤：62-64〕。だが、陸軍士官学校の同期生である今村均や田中静彦^{しずいち}が大将になったのは、南方作戦の責任者への論功行賞であり、この2人と比べるだけで、「弱い状況下にあった」と言うのは無理である²⁾。それに、本稿で改めて示すように、河辺と東条の関係は極めて良好だった。

結局、河辺について、元副官の小川徳重がまとめた追悼録『河辺正三』〔小川 1966〕を超える研究が現れていないのである。要職を歴任した河辺は、昭和の陸軍の一面を体現する存在であり、このような現状には改善が求められる。そこで本稿では、河辺の「前史」を、以下の4点を念頭に置いて分析する。①元々河辺が、どのような対アジア政略を持っていたのか（あるいはアジアへの関心は薄かったのか）、②大亜細亜協会（1933年発足）の影響を受けていたのか、③東条英機とはどのような関係だったのか、④陸軍でどのように処遇されていたのか（順調に出世していたのかどうか）。

これらの検討によって、日本の対中戦争までのアジア認識・経験と、その後の東南アジア占領との関係という問題（今に至るまで追究しきれていない難問³⁾）に迫ろうと思う。ただし、河辺の基本情報が広く共有されているとは言えないので、項目ごとに立論しては、話がわかりづらくなり、重複部分も増えてしまう。そのため、本稿では、河辺の人物史を一通り検討・叙述し、最後に小括をする。河辺が、毒ガスをはじめとする近代兵器の開発・運用に関わっていたことも、以後の研究に活かすために、省略せず記すことにする。

史資料については、まず、先の『河辺正三』〔小川 1966〕を踏まえる。同書は分厚いものではなく、上記の①②③を物語る記事も少ない。それでも、「年賦」（112-115を参照）や幼少期の話など、有用な情報も載っている。本稿では、同書を利用しながら、JACAR（アジア歴史資料センター）のデータベースや、関係者の回想記、資料集などに現れる情報を加味し、検討を進める。河辺の日誌（現存が確認できるのはビルマ時代以後）にも、過去の回想が含まれているので利用する。そして、「2」で、誕生からヨーロッパ留学までを扱う。次いで、「3」で、日中戦争前夜を、「4」で、1937～1938年の日中戦争初期を扱う。「5」では、1939～1942年の、教育総監部本部長、「満洲」勤務、支那派遣軍総参謀長の時期を取り上げる。その上で「6」で、ビルマへの派遣について触れ、小括をする。

2. 誕生からヨーロッパ時代

①陸軍大学校の卒業まで

河辺正三は、1886（明治19）年12月に、富山県砺波郡苗加村^{のうか}の大地主・河辺純三の三男として生まれた。純三は、漢詩・書道・俳句を得意とする文化人でもあった。河辺が生まれた3年後には、東野尻村（苗加村と野村島村が合併）の初代村長になった。だが、家業に熱心でなく、繭相場で損失を受けたこともあり、家は急激に傾いた〔河辺重三郎：50-51〕。

河辺は純三に、幼少期から学問の指導を受けていた〔桜井：54；村田：64；河辺浩：92〕。それが、生涯にわたる詩文への関心に繋がった。また、若年の頃から、仏教にも関心を持っていたが⁴⁾、これについては、純三から学んだという話は見当たらない。おそらく、富山という仏教が盛んな地域の中で、自然に関心を持つようになったのだろう。

さて、家計が苦しくなる中、河辺の中学校への進学は危ぶまれた。だが、出町高等小学校の校長・高島徳太郎が進学を強く勧め（あるいはその資金援助で）、地元の高岡中学校に進学した〔河辺重三郎：52；桜井：56；村田：63〕。同校では、2・3年生の時に特待生になったという。（ちなみに、3つ上級に松村謙三、1つ上級に正力松太郎がいた。）

河辺は、日露戦争のさなかの1905年3月に、高岡中学を卒業した。長兄の祐之は、同戦争に陸軍中尉として参加しており、河辺も軍人を目指した⁵⁾。そして、4月に、陸軍士官学校を受験した。この時、幼年学校を受ける弟の虎四郎^{とらしろう}と共に、列車で会場の金沢に行き一泊し、帰りは家まで歩いたという〔河辺重三郎：53；石崎申之：104-105〕。

試験に合格した河辺は、12月に、第19期生として陸軍士官学校に入校した。戦争中の選抜だったこともあり、1000人以上の大量採用だった⁶⁾。同期生には秦雅尚^{まさひさ}、斉藤弥平太、今村均、本間雅晴、田中静彦、塚田攻、金子定一らがおり、本間、田中、金子は生涯にわたる友人になった⁷⁾。

1907年6月に陸軍士官学校を卒業した時、成績は115位だった〔小川：10〕。必ずしもトップ級ではなく、大尉以後の進級は、秦や斉藤より約1年遅れることになった。卒業後の河辺は、金沢の歩兵第35連隊を原隊として、1912（大正1）年12月から1915年11月まで、陸軍大学校（第27期）で学んだ。同校を優等（次席）で卒業したことで（首席は今村均）、士官学校での席次を挽回し、軍事エリートへの道を取り戻した〔小川：10；石崎潔信：108〕。この時、陸軍大学校の同期生には、磯谷廉介（陸士16期）、東条英機（陸士17期）、岡部直三郎（陸士18期）、今村、本間、金子（陸士19期）らがいた。

②エリート士官として

この後、1916年8月から1917年12月まで、河辺は教育総監部で勤務した（教育総監は一戸兵衛大将）。さらに、1917年12月から1918年3月まで、第35連隊の中隊長を務めた。その上で、1918年4月から1921年7月まで、スイス（さらにドイツ）に留学した。

スイスへの到着後、まもなく第1次大戦が終了し、隣国のドイツは混沌とした状態になった。河辺はそれを観察し、「西方戦場ヨリ独軍帰還ノ情況」（3報）、「独逸臨時政府護国軍建設ニ関スル実施命令」、「独逸臨時連邦海軍編成法律案」などにまとめ、陸軍省に送付した（C15120234300, C15120233300, C15120230800, C15120233500⁸⁾）。さらに、スイス航空界の現状についても報告した（B12081121900）。また、大使館附武官事務取扱の代わりに、「独逸休戦提議ノ顛末」を調査して報告

したことも知られる（C03025187600）。

その間、1919年9月頃に、陸大の同期生である東条英機（陸士では東条が2つ上）がスイスにやって来た。その後、河辺と東条はドイツに移り、東条は河辺の帰国後しばらく滞在した。また、山下^{ともゆき}奉文（陸士が1つ上、陸大が1つ下）も、遅れてスイスにやって来て、後にドイツに移動した⁹⁾。この3人の交流を、『山下奉文』[沖：129-144]が詳述している。3人は仲が良く、カメラに凝り、イタリア、オーストリア、ドイツなどで、記念写真を撮りまくったという。実際、『河辺正三』は、3人のおどけたポーズの写真を載せている[村田：60]。また、河辺は、スイス軍を視察して、軍の精神教育について、山下と意見を交換した。河辺は厳しい教育が必要だと述べ、山下は、国家意識があれば、それ以上の厳しさは不要だと述べたという[沖：142]。

1921年7月以後は、教育総監部課員として東京で勤務した。その間、1924年2～8月に、和田^{かめじ}亀治中将に随行して欧米諸国を視察した（B13091435200）。その最中の6月に参謀本部部員になり、帰国後、1924年8月から1926年3月まで、川村景明の元帥副官を兼任した。また、1925年6月以後、陸軍大学校兵学教官を兼任した。1927（昭和2）年1月には、ジャワに出張したことが知られる¹⁰⁾。これらの業務・経験を通して、河辺は、大戦後の欧米諸国では、国家・国民の結束が強まっており、軍縮が平和をもたらすものではないと考えるようになった[河辺正三 1925]。

この後、参謀本部第2部（部長は二宮治重少将）で、新設の第4班長を務めた。班には町尻量基、松井太一郎、隈元^{ささき}笹樹らがあり、「情報蒐集の企画並びに情報の総合判断の業務」、「宣伝謀略と国際条約関係の事務」を扱った（C15120064900）[清水規矩：104-105; 清水盛明：108; 松井：180]。その後、ドイツ班長に移り、1929年時点で、同班長だったことが知られる[池谷ほか：88]。同年8月からは、ドイツ大使館附武官として、2年半にわたりドイツに赴任することになった。

河辺はドイツで、駐在員たちの世話をし、彼らの研究をとりまとめる役割を果たした。同時期にドイツにいた原^{とみお}乙未生（陸士27期、帰国後、戦車開発の第一人者になった）は、河辺が毎週、研究事項の報告会を主催したと述べている。河辺は原に、ゼークト將軍の『国防論』を読むように勧めたという[村田：65-66]。また、高嶋辰彦（陸士30期、1930年代末から皇戦会を主催した）から研究の報告を受けたことも確認できる（C15120158000）。この他、河辺が陸軍中央に、世界動力会議について報じたことも知られる（C01006506000）。

この間、満洲事変の直前の1931年7月には、目前に迫った陸軍の軍縮会議で、フランスにならい、ソ連に対する備えの必要を（大袈裟に）訴えることを、陸軍中央に提案した（C08051941600）。そうして、「我国ノ東亜ニ於ケル特種ノ立場ヲ主張」するというのがあった。河辺は、このような政治的な働きかけを、生涯にわたって避ける傾向にあった。だが、軍縮問題に強い関心を持っていたので、この時には例外的に進言したのであった。

3. 日中戦争前夜

①日本での勤務

河辺は、満洲事変のさなかの1932年3月に、参謀本部附となり、2年半ぶりに日本に戻った。帰着後、4月に名古屋の第6連隊長となり、久しぶりの部隊勤務についた。河辺は、同連隊は銃剣術が不得意だとして、訓練に励ませた[村田：67]。その後、1933年8月に歩兵学校教導連隊長となり、

千葉で勤務することになった。

さらに、1934年3月から2年間、教育総監部第1課長を務めた。このポストは、西尾寿造（陸大22期次席）、園部和一郎（陸大25期優等）、山脇正隆（陸大26期首席）らが歴任した、華々しい部署だった。当時、教育総監には、皇道派の真崎甚三郎が就任していた（1934年1月～1935年7月）。真崎は、1934年7月に、「軍隊内務書」の改正を行い、「皇軍意識」の徹底や、「隊長中心主義」の高唱（将兵の自覚尊重の是正）を図った（C01001266800）。河辺は、戦後の著作で、「我が陸軍八十年の精神教育は畢竟天皇親率の精神に発芽し其精神を神髄として生育し其精神を中核として結実した」とまとめており〔河辺正三1980:134〕、この「改革」を是としていたはずである。

真崎の日誌にも、訓話の下書きを河辺にさせ、それを「大体上出来ナリシ」と評す記事があり、思想の近似が窺える¹¹⁾。のみならず、真崎は、天皇機関説を支持する渡辺錠太郎大将の発言を、「総監部の第一課長（武島注：河辺のこと）も、新聞記事を見て憤慨して居りました」と述べている〔林：245〕。真崎は、河辺を自派の一員、もしくはそれに近い存在と見ていたことになる¹²⁾。

真崎を含めた皇道派は、ソ連との即時開戦を目指していた。教育総監部の課員たちは、それに応じて、1935年11月に「対ソ軍歩兵戦闘」を改正し、1936年12月には対ソ戦のための「歩兵操典草案」を制定した〔中島ほか1991b:8-9;1991c:44-45〕。河辺の第1課は、教育制度・教育令、典範を扱っていたのだから、これらの事業に直接に関わったはずである。河辺は、このような経験をした上で、後述するように、旅団長として中国に赴任した時に、同地で対ソ戦の新戦法の訓練に励んだのだった。

その一方で、河辺は、陸軍自動車学校研究所員や陸軍軍需審査会委員として、兵器の開発・審査にも関わっていた¹³⁾。1933年に誕生した習志野学校（毒ガス部隊）の、北「満洲」での訓練の手配をしていたことも知られる¹⁴⁾。この後も、河辺と毒ガスとの関係は断続的に続くことになった。

②中国での勤務

2・26事件（1936年2月）後の人事異動で、河辺は新設の北支那駐屯歩兵旅団長（支那派遣軍司令部の隷下。以下、河辺旅団と記す）として、北京（北平）に移った。前年以来、3人の同期生が旅団長になっており（秦、斉藤、本間）、河辺もその「榮譽」を得たことになる。もっとも、「支那通」「支那屋」ではなかった河辺が、中国に転出したのは不自然である。皇道派との距離の近さが影響して、外地に放り出されたと見るべきだろう。陸士・陸大の同期生で友人の金子定一（大亜細亜協会のメンバーでもあった）も、この時に皇道派との繋がりを疑われて予備役に入れられた〔金子：95〕。河辺も、1つ間違えば現役を追われるところだった。

ただ、対ソ戦闘の研究に携わり、訓練方法を追究していた河辺を、中国に置くことは、華北分離工作の抑制に繋がるはずだった。実際、中国との関係改善を目指していた石原莞爾少将（1936年6月に戦争指導課長、1937年1月に第1部長心得、3月に中將になり第1部長）は、河辺の赴任時に、中国とことを構えるつもりがないことを伝え、「その点十分諒解出来る」との返事を得たという〔寺平：22〕。また、遠藤三郎大佐（後に参謀本部総務部第1課長）も、河辺を含めた人事を、中国との関係改善の立場から評価し、河辺個人についても「極めて温厚かつ慎重な人」と評していた〔遠藤：93〕。

北京に赴任した河辺は、隷下の部隊に、対ソ戦に向けた新戦法の訓練を行わせた¹⁵⁾。その一方で、内外の要人と積極的に交流をした。例えば、アメリカの大使館附武官やその随員に、日本刀を送ったことが知られる¹⁶⁾。また、1936年9月の豊台事件（日中両軍の小衝突）に際して、部下の射撃を禁止し¹⁷⁾、中国の要人たち（宋哲元ら冀察政府の要人であろう）には、日本への抵抗を断念するよう

説いた¹⁸⁾。

1937年5～6月になると、石原莞爾らは、支那派遣軍参謀の和知鷹二中佐（大亜細亜協会の幹部でもあった）らが、中国に謀略を仕掛けようとしていると疑った。そして、軍事課高級課員の岡本清福^{きよとみ}大佐を派遣するなどして、現地の様子を何度も調べた。岡本は、河辺にも事情を聞いた。さらに石原は、自ら河辺に書簡を送り、弟の虎四郎（大佐、戦争指導課長）にも私信を出させた。河辺は、安心せよという意味のことを書いて返した¹⁹⁾。

4. 日中戦争初期の河辺

①盧溝橋事件から北支政策への関与

まもなく、1937年7月7日夜に、盧溝橋付近で演習中の河辺旅団の一部に、実弾が撃ち込まれた（盧溝橋事件）。周知のように、この時、隷下の支那駐屯歩兵第1連隊長の牟田口廉也大佐が、独断で戦火を広げようとした。河辺は牟田口に憤怒の表情を見せたが、無言を通したと言われている〔半藤：1988: 62-64; 広中：106-107〕。ところが、7月後半に、北京の广安門が閉ざされた時、河辺は城内の在留邦人や部隊を救うために、積極的に戦おうとした²⁰⁾。河辺の変化は、日中両軍の対立が収まらない中、中国軍の「敵性」を放置するばかりでは安寧が得られないと考えてのことだったろう²¹⁾。

そして、河辺旅団は7月末に、参謀本部の指示にもとづき、北京城外（南西側）の中国軍を攻撃した。8月8日には北京への入城式を行い、河辺の「勇名」は轟いた。この後、陸軍中央は、北上する国民政府の軍に備える含みで、北京周辺に兵力を集めようとした。その間、河辺旅団は、北京にとどまり、同地を安定させる役割を果たした（C11110926100）。その際、支那駐屯歩兵第1連隊に配属されていた森田徹中佐（当時）の伝記は、河辺が、治安・失業対策として、住民に道路の建設を行わせたとしている。さらに、青年訓練所を設置し、住民の親日化に努めたという〔日比野：278-280〕。もっとも、これらの本格的な実施は、河辺の転任後だった可能性が高い。

河辺は、8月26日付けで、新設の北支那方面軍参謀副長に転任した。司令官は寺内寿一大将、参謀長は岡部直三郎少将だった。同軍は、第1軍（元の支那駐屯軍）や第2軍（新設）を指揮し、石家荘までを作戰地域とした。石家荘会戦後の10月17日には、河辺は同地の第1軍司令部を訪ね、前進を停止する指示をした。第1軍は反発し、黄河の線までの進出を主張した。同軍の日誌は、この時のことを、「寺内大将ハ雑談ノ間宜シク黄河ノ線ニ進出スヘシト豪語シアリ、個人トシテノ司令官ノ言ト参謀副長ノ言トハ正反对ナルカ東京ヨリ何等カノ抑制ナルカ如ク方面軍参謀長（参謀副長ハ参謀長ノ意ヲ受ケナリ）ハ東京ノ指示ヲ楯ニトリ頑トシテ停止説ヲ持シアリト見タリタリ」としている（C11110961400）。

この文章からは、河辺（及び参謀長の岡部直三郎）は、単に東京の指示に従って動いただけのようにも読める。ただ、東京でも拡大・不拡大の両論が競り合っていたし、寺内は現地軍としての裁量で黄河を渡ろうとしていた²²⁾。そのことからすると、河辺は自身の意志で事変の拡大を食い止めようとしたことになる。河辺は後に、周仏海に対し、戦闘の不拡大に努めた旨話しているが²³⁾、それは嘘ではなかった。

また、占領地に設置する中国人の行政機構についても、永続的に傀儡政府にする立場とは、距離を置いていた。北支那方面軍の民衆政策は、特務部（部長は喜多誠一少将）が担当していた。同部は、

9月8日に「北支作戰後方地域ノ行政指導要領」を策定し、後方地域の行政について、「軍特務部ノ内面指導ノ許ニ支那側行政機関ヲシテ施行セシム」とした²⁴⁾。

それが、戦線が拡大していく中で、方面軍は、12月14日付けで、中華民国臨時政府を発足させた。この時に方面軍では、同政府に軍を持たせるかどうかの論議があった。方面軍第2課長の大城戸三治大佐は、特務部の提案に従って、軍を持たせようとしたが、河辺は反対した。結局、寺内と岡部の判断で、軍は設置されることになった〔岡部：137〕。

河辺が抵抗した理由は、この政府の統括地域（河北、山東、山西省）を、非武装地帯にしようとしたからだ²⁵⁾。つまり、同政府を、日本に反抗する可能性を持つものと規定し、だからこそ武装化を見送ろうとしたのだ。要するに河辺は、臨時政府を、冀察政府を拡大したようなものにしようとしていた。

②中支那派遣軍での活動

この後、河辺は、1938年2月に、中支那派遣軍の参謀長として、南京に赴任することになった。同地では、松井石根予備役大将、臼田寛三大佐、長勇中佐ら大亜細亜協会のメンバーが、中華民国維新政府の樹立を進めていた。松井と交代して軍司令官になった畑俊六大将は、応じてきた中国人の政治家が「小物」だとして、もう少し様子を見ようとした〔畑 1983: 124-126; 2009: 215〕。だが、河辺は反対せず〔畑 1983: 124-125〕、結局、畑は樹立を認めた。

この件についての河辺の考えは、はっきりとはわからない。維新政府の設置に、日本の勢力圏を永続的に広げる意味があったとすれば、河辺の思想は変化したことになる。ただ、蒋介石との寛大な条件での平和を目指していた外務省東亜局長の石射猪太郎でさえも、簡単に解消できることを理由に、同政府の樹立を認めていた〔石射：358〕。そのことからすれば、河辺が同政府を認めたことは、傀儡政権の恒久的な設置を目指した証拠にはならない。

いずれにせよ、ここでも、政務を主に担当したのは、特務部（原田熊吉少将）だった。河辺はむしろ、徐州作戦、漢口作戦という大作戦の計画・指導に忙殺された²⁶⁾。その際に注目されるのは、両作戦で毒ガス弾（くしゃみ、催涙性のもの）を大々的に使ったことである²⁷⁾。河辺は、教育総監部第1課長時代に、習志野学校の訓練に協力していた。そのことからすれば、これらの使用は河辺が主導していた可能性がある。畑は、戦後、巣鴨に抑留された時に、米軍がこの件を河辺に厳しく問うたと記している〔畑 2009: 338-339〕。連合軍も、河辺が深く関与していたと見たわけである。

1938年11月の漢口占領に当たり、河辺は入城式をやらなかった。谷田勇大佐（支那派遣軍第3課長）によると、漢口作戦は、蒋介石に白旗をあげさせるのが主目的だったが、それに成功せず残念だったと説明されたという〔池谷ほか：88〕

5. 日中戦争の長期化、そして対米英開戦

①教育総監部から「満洲」へ

2年半にわたる前線での勤務を経て、河辺は1939年1月に教育総監部本部長になり、東京に戻った（3月に中將に進級）。本部長は1940年3月まで務めたが、その間の1939年9月に、西尾寿造が支那派遣軍総司令官に転出し、河辺は1か月にわたり総監代理を務めた。この間の訓練の手配に関す

る行政文書が多数残っている。

先の高嶋辰彦は、この時期の河辺について、「教育総監部での精神建設の御努力には他部ながらも敬仰が深かった」と述べている〔高嶋：19〕。河辺も、動員の拡大によって、軍人の質が低下したと考え、それに対し、「益々方策を尽して統帥要素の確保、涵養、幹部教育の振作に努力を傾倒した」と回想している〔河辺正三 1980: 103〕。「皇軍」意識の徹底、厳格な軍紀の注入に、一層力を入れる趣旨で、業務を行ったのだった。

一方で河辺は、毒ガス戦に関する操典の整備にも関わっていた。河辺が本部長を務めていた間に、教育総監部は、「演習用化学戦数量表」、「事变ノ教訓・7号（化学戦）」、「瓦斯防護必携」などをまとめた〔中島ほか：1991c: 48-49〕。先に述べたように、戦後、アメリカ軍はこのことも指摘し、河辺と毒ガス使用の関係を追及した。

この後、1940年3月には、第12師団長になり「満洲」の東寧に移った。師団長になったのは、陸士の同期生で4番目（斉藤、今村、本間に続く）であり、出世コースに乗ったことになる。東寧での様子はあまり伝わらないが、「満洲東部兵要地誌資料」をまとめたことが知られる（C01003140600）。

1941年3月には、同師団など3個師団を擁する第3軍司令官（牡丹江）に就任した。これは、同期生で初の軍司令官だった。同年6月22日に独ソ戦が始まると、関東軍は河辺を統監とし、特種演習の準備を進め（C01003694900）、「満洲」に大兵力を集めた。第3軍は6個師団に増強され、各種の新編部隊や新兵器も配備された。軍馬も2～3万頭から5～6万頭に増やされた。その際、田垣住雄獣医大佐（獣医部長）の提案を受け、坂道での牽引に牛も使うことにした〔田垣：108〕。

この時期の陸軍について、海軍の高木惣吉大佐が収集した「総合情報」は、日中戦争を批判する対ソ強硬グループの「皇道派」（中心は柳川平助、小畑敏四郎らで、2・26事件時の皇道派の後身にあたる）があったとし、河辺をその一員としている〔松浦：381〕。確かに、河辺は皇道派に近く、日中戦争の拡大にも批判的だった。ただ、公刊戦史『関東軍・2』にあるように、河辺は、関東軍にソ連と戦う力はないと考えていた²⁸⁾。それが、部下に対して、好機を捕捉するという強気な訓示をしたため、対ソ強硬論者と見られたのだった。

結局、対ソ開戦は、ソ連が極東の兵力を維持したので見送りとなり、日本は12月8日に対米英開戦に踏み切った。開戦の知らせを聞いた河辺は、「日本の主脳部は今大変な道を踏みはずしたと長嘆息をした」ということである〔石崎潔信：109〕。これは、河辺が戦後、親族に語ったというエピソードだが、先の田垣も、河辺が対米英開戦を喜んでいなかったことを記している。田垣によると、第3軍司令部の中で、参謀副長の土居明夫少将は意気盛んだったが、「その他は慎重な面持ちであった」ということである〔田垣：110〕。

この後（1941年末～1942年初頭）、河辺にとって、進退に関わる大事故が起こった。部下の失火で、東寧付近の大兵器廠が焼け、3日間で重要兵器や弾薬を失ったのだった〔田垣：109〕。河辺は、責任をとろうと進退伺を提出した。だが、これは受理されず、以後の人事や昇進にも影響はなかった。2回目の進退伺（1944年2月のバ・モオ暗殺未遂事件の責任を取ろうとしたもの）の時と同様、このように取り計らったのは東条陸相だった²⁹⁾。河辺は東条に感謝し、その恩に応える意を強めた。

②再び中国戦線へ

河辺は、1942年8月には、富永恭次中将（東条の側近で、人事局長）の差配で支那派遣軍総参謀長となり〔畑 1983: 365〕、再び畑俊六大将（総司令官）を補佐することになった。この時、河辺には、

重慶攻略作戦の取りまとめが期待されていた。徐州作戦、漢口作戦を成功に導いた実績がかわれたのである。河辺と畑は、この作戦に懐疑的だったが、指示にもとづいて研究を進めた〔草地：29-31〕。

また、河辺の赴任時、中国の占領地では、大東亜省の設置に伴う機構替えが論議されていた。陸軍中央と支那派遣軍の大勢は、中国大使（重光葵が務めていた）を陸軍司令官の兼任とし、機構の簡略化を図ろうとした。だが、海軍と、河辺の前任の後宮淳中將^{うしろく}が反対していた。交替した河辺は、陸軍司令官が兼任する案を支持した³⁰⁾。この動きを、河辺が汪兆銘政権の「格下げ」に同調したと見ることもできる。

だが、一方で河辺は、10月29日に大本営政府連絡会議が定めた「国民政府ノ参戦並ニ之ニ伴フ対支措置ニ関スル件」〔参謀本部 1987: 157-158〕に積極的に応じた。これは、汪兆銘政権の対日協力を促進するために、敵国財産を移管し、租界も還付しようとする案だった。総司令官の畑俊六は、このような一連の「転換」に批判的だった〔畑 1983: 382〕。それに対して河辺は、連絡会議の意図に逸早く反応し、日本の特務機関の地方統治機構からの撤収を進めようとした。そして、1942年11月18日に、河辺の名で「大東亜省現地機構整備ニ伴フ上海陸軍部、中支特務機関業務調整実施ニ関スル件」を出した。これは、中国の県政府以下に、「支那側行政機関ヲシテ当ラシメ県連絡官ハ特務機関本来ノ任務中真ニ必要ナル連絡ノミニ任セシムルモノトス」というものだった³¹⁾。日本軍（特務機関）は、汪兆銘政権に地方統治を任せ、原則として手をひこうとしたのだった。

この後、東京では、11月27日の連絡会議で、（中国の）現地政権に任せられることを任す方針が確認され、12月21日に「対支新政策」が確定した〔武島 2016a: 44〕。そして、25日に、総参謀長だった河辺の他、北支那方面軍、駐蒙軍、第11軍、第23軍の参謀長が東京に集められ、陸軍省・参謀本部による伝達式が行われた。既に指摘したように、河辺は帰りの飛行機で、「新政策」を評価する漢詩を詠んだ〔武島 2016a: 44〕。

6. 小括

この後、1943年3月に、ビルマ方面軍司令官となった後の河辺については、冒頭の論文で触れてきた。参謀本部は、赴任する河辺に、「（武島注：ビルマの政府に）徒ラナル干涉ヲ避ケ彼ノ創意ト責任トヲ尊重シテ寛裕適切ナル輔導ヲ与ヘル」ことを指示した。これらの指示を受けて、ビルマに到着した河辺は、「独立」を「満洲国型」にとどめようとする軍政監部のメンバー（軍政監は中永太郎少将、政策主任は磯村武亮^{たけすけ}少将）に警告を与えた。河辺の日誌によると、「軍政監部側カ余リニ彼（武島注：ビルマ側）ノ言動ヲ拘束セントスルノモ予トシテハ氣ヲ配ルヘキコトノ一ナリト考ヘラル 従テ今後ノ指導方針ニ就テ予ヨリ軍政監タル参謀長以下ニ一言センシコトモ右ノ含ミヲ以テセリ」ということである〔武島 2016a: 45〕。

そして、以後の河辺が、「カネ」「モノ」「ヒト」の各点で、バ・モオ政府に譲歩を重ねていったのは、既に指摘した通りである。

以上の歩みを踏まえて、「はじめに」の4つの問題について、次のようにまとめておく。まず、①対アジア政略は、河辺にとって専門外であり、強い関心を持っていた形跡はない。北京に旅団長として赴任した後も、力を入れたのは対ソ戦のための訓練だった。日中戦争についても、基本的に不拡大の立場をとり、中国の占領地に衛星国をつくることに消極的だった。その後、1941年の段階でも、

日中戦争への批判者と見られていた。

次に、②大亜細亜協会の影響だが、日本がアジア連邦の盟主となり、イギリスと対決するような政策を、河辺が積極的に支持していた形跡はない。同協会の有力メンバーである本間雅晴や金子定一と、仲が良かったのは事実である。だが、河辺は、イギリスやアメリカが、その植民地（ビルマ、フィリピン）を苛酷に取り扱っていないと考えていた〔武島 2016: 47〕。また、欧米人を物質主義（者）として貶めることにも批判的だった〔河辺正三 1925: 36〕。そのような河辺が、協会の理念に心から賛同していたはずがない。

それから、③東条英機との関係だが、若い頃から親密だった。壮年になってからも、東寧での失火やバ・モオ暗殺未遂事件の責任を不問にするなど、東条は河辺に温情を示した。このような人間関係の中で、河辺がビルマに派遣されたのだった。河辺はビルマで、バ・モオに国防大臣を兼任させようとしたが（アウン・サンと交代させる）、これなどは東条の参謀総長兼任（1944年2月）に着想を得たものだった³²⁾。

付言すると、河辺は皇道派や石原莞爾とも良好な関係にあり、武藤章とも親交があった³³⁾。それに、イギリス文化を愛好する田中静彦や、皇戦会の高嶋辰彦とも親しかった。半面、宇垣一成・小磯国昭らを嫌っていた形跡がある（「河辺正三日誌」1944年7月22日、11月15日）。そのことからすれば、宇垣がつくった秩序の打破を志向する一員として、多方面と交友を結んでいたと言えるのかもしれない。

最後に、④陸軍での出世についてだが、河辺は陸軍士官学校の成績が優れず、大尉以後、進級は遅れがちだった。それを次第に挽回し、1941年には同期生で初の軍司令官になった。さらに、1939～1943年に秦雅尚、斉藤弥平太、藤井洋治、本間雅晴、儀峨徹二、小須田勝造、熊谷敬一らが予備役になり、塚田攻が事故死したことで、同期生の間での席次が上がった³⁴⁾。日中戦争以後、河辺の地位は急上昇したことになる、その時期には陸軍の主流・主役の一人だったと言える。

以上のうち、①②から、河辺が「新政策」に違和感を持たなかったわけがわかる。それに、③④のように、河辺の立場は、この時期の陸軍の主流と言えるものだった。これらのことから推察すると、「新政策」は、陸軍において、特殊な政略ではなく、現れるべくして現れた政策の一つと言えまいか。本稿は素描的な分析だが、今後も検討を続け、話の精度を上げていきたい。

注

- 1) 近年では、『牟田口廉也』〔広中 2018〕、『戦慄の記録』〔NHKスペシャル取材班 2018〕などが、河辺について比較的詳しく解説している。だが、依然、盧溝橋事件とインパール作戦で河辺のイメージをつくっている。
- 2) 付言すると、今村は陸軍大学校を首席で卒業しており、昇進が早いのは自然なことだった。田中については、重病になったことへの配慮も働いていた〔額田：431；塚本：165〕。
- 3) この問題について、筆者なりの見解を、「（新刊書紹介）中野聡『東南アジア占領と日本人』」〔武島：2018b〕で提示したことがある。参照されたい。
- 4) 士官候補生の時の、能登一周行軍で、真宗の正信偈を合唱して進んだという〔石崎有信：59〕。神直道「将軍の歌」によると、戦後出家した時には、特定の宗派に属していなかったという〔神：15〕。

- 5) 祐之について、小川徳重や河辺重三郎は、会社役員、在郷軍人分会長などと記している〔小川：116〕〔河辺重三郎：52〕。だが、「一線に活躍する将星」〔藤本：174〕は、日露戦争の勇士で、軍では河辺と入れ替わりになったとしている。実際、「明治三十一年 参謀本部、教育総監部、憲兵司令部日報」（JACAR データベース、レファレンスコード C09060209100）が、1898 年 12 月に要塞砲兵射撃学校生徒になったことを記しており、比較的長い軍歴を持っていたことがわかる。
- 6) 「座談会 6」〔中島ほか：1991a: 20, 24〕で、和田盛哉（元中佐、教育総監部課員などを歴任）は「千何百人」と述べ、表には卒業生が 1068 人だったと記されている。『いっさい夢にござ候』〔角田：34, 38〕は、入学者が 1183 人、落伍者 115 人としており、差し引き 1068 人が卒業生だったことになる。
- 7) 本間・田中と親友だったというのは、「資料河辺正三伝」〔桜井：57〕、「髭をはやしたハイカラさん」〔河辺浩：94〕、「序」〔河辺正三 1957：1〕による。他に『いっさい夢にござ候』〔角田：72〕は、河辺が本間の再婚の世話をしたとしている。金子については、河辺は日誌に「友達」と書き（「河辺正三日誌」1944 年 10 月 11 日）、1944 年 11 月 15 日には、政局について話を聞いている（同日の日誌）。防衛省防衛研究所戦史研究センター蔵、史料番号は、中央・作戦指導日記・266-270。
- 8) これらの記号は、JACAR データベースのレファレンスコード。それぞれの史料名などは末尾を参照。
- 9) 東条について、『東条英機・上』〔ロバート・ビュート：25-26〕は、1919 年秋にスイスに出発し、ドイツへの移動後、1922 年に帰国したとしている。また、『昭和の天皇と東条英機』〔亀井：26〕は、1919 年 9 月にドイツ駐在命令を受け、まずスイスに赴任し、その後ドイツに移ったとしている。「東条英機大尉以下五名海外出張ノ件」（B07090462700）からすると、1919 年 8 月にスイス派遣の手続きがとられたことになる。なお、『山下奉文』〔沖：129, 134〕は、山下のスイス入りを 1918 年 5 月としているが、到着の前後関係からして、この日付は誤りである。
- 10) 「参謀本部歴史」（C15120063800）、『陸軍省人事局長の回想』〔額田：432〕による。これは、欧米課ドイツ班が、オランダ領の「蘭印」の調査を担当した関係によるものだった。
- 11) 『真崎甚三郎日記・昭和 10 年 3 月～昭和 11 年 3 月』〔真崎 1981a：49〕。この他、『真崎甚三郎日記・昭和 7・8・9 年 1 月～昭和 10 年 2 月』〔真崎 1981b: 169, 339〕には、河辺についての記事が 2 か所にある。
- 12) 真崎甚三郎関係文書（国会図書館憲政資料室蔵）の河辺の書簡（557 番、1952 年 1 月 28 日のもの）からは、戦後も交流があり、親密だったことがわかる。真崎が死去した時には、河辺は弔問に訪れた〔田崎：369〕。
- 13) 陸軍軍需審議会については、「陸軍軍需審議会令制定ノ件」（A14100304400）を参照。陸軍の重要軍需品の研究方針・制式・陸軍技術などについて審議していた。
- 14) 『真崎甚三日記・昭和 7・8・9 年 1 月～昭和 10 年 2 月』〔真崎 1981a：339〕。この実験の詳細は、『十五年戦争極秘資料集 補巻 2（毒ガス戦関係資料Ⅱ）の「満洲国内ニ於テ陸軍習志野学校冬季研究演習実施の件」〔吉見・松野：57-58〕、『陸軍習志野学校』〔陸軍習志野学校史編集委員会：123-124〕を参照。
- 15) 対ソ戦のための訓練を行ったことは、秦郁彦が『日中戦争史』〔秦：164〕で触れている。その後、『昭和史の天皇・15』〔読売新聞社 344-348〕が、第 8 中隊の斧窪聖行、鈴木久義、佐藤一男らに取材し、仮想敵が中国でなくソ連だと、上官から口が酸っぱくなるほど言われていたこと、各部隊の

代表者が豊台の教導学校に入り、新しい戦法を学び、隊に持ち帰る手はずだったことを紹介した。他に、歩兵第2連隊の小隊長だった桂鎮雄中尉も、激しい対ソ訓練をしていたと述べている〔桂：129〕。河辺も、東京裁判の時に、この時の訓練は、装備が優秀なものに対するもので、中国と戦う気などなかったと述べている〔河辺正三 1947：6-7〕。

16) 「河辺正三日誌」, 1944年3月6日, 5月24日の記事による。

17) 射撃禁止の件は〔村田：68〕による。牟田口も回想記で、河辺から、一切の戦闘行為は相成らんと厳命されたと記している〔牟田口 62〕。

18) 「一線に活躍する将軍」〔藤本：175〕は、この時の河辺について、「彼が支那側要人達を説き支那の無謀を論ずる時は全く別人の感があつたといはれてゐる」と記している。

19) 『昭和史の天皇・15』〔読売新聞社：372-375〕, 「河辺虎四郎少将回想応答録」(『現代史資料・12』〔小林ほか：412-413〕)などを参照。岡本の件は、『元陸軍次官柴山兼四郎中将 自叙伝』〔柴山：108〕にも記載がある。

20) 〔寺平：28〕。また、「橋本群中将回想応答録」も、河辺と牟田口がいきり立っており、「兎に角斯う云ふ風な所置ではとても承服が出来ん」と言っていたとしている〔臼井ほか：324〕。

21) 河辺は広安門事件の報告で、中国側の敵性を強調しており、このように推定できる(C11110925100)。

22) 「支那事変記録・その3」(防衛省防衛研究所戦史研究センター蔵, 史料番号は、文庫・依託・402)は、寺内が田中新一大佐(軍事課長)に、「停止線」の選択を現地軍に一任するよう要求したことを記している(1937年10月24日の記事)。北支那方面軍に配属されていた閑院宮純仁少佐も、方面軍が済南の攻略を求めたが、11月22日に参謀本部から控えるよう指示があったと記している〔閑院宮純仁 1966：168〕。

23) 『周仏海日記』〔周：492〕, 1942年10月9日の記事。

24) 『日中戦争・対中国情報戦資料・9』〔栗屋ほか：241-242〕を参照。

25) 1938年1月10日の北支那方面軍司令部「治安維持関係事項」(C04120143100)は、反対意見は、河北・山東・山西省に非武装地帯を置くことを目的としているとしている。

26) 活動の一端は、『第百一師団長日誌』〔古川ほか：411, 440, 456, 479 など〕に記されている。

27) 『十五年戦争極秘資料集・補巻2(毒ガス戦関係資料Ⅱ)』〔吉見ほか：309-322, 333-343〕が収める「昭和十三年七月 徐州開会戦及安慶作戦ニ於ケル特種煙使用ノ戦例及成果」と「昭和十三年十二月十日 武漢攻略戦間ニ於ケル化学戦戦例集(其一)」が、具体的な使用例を列挙している。

28) 『関東軍・2』〔防衛庁防衛研修所戦史室 42-44〕は、田中新一のメモと河辺の談話によって、このことを明らかにしている。

29) 「河辺正三日誌」の1944年2月27日に、バ・モオ暗殺未遂事件で進退伺を出したのが、東寧に続く話だということが書かれている。この事件の時の河辺の動きは、「バ・モオ政府(ビルマ)と日本軍の葛藤」〔武島 2018a〕などを参照。

30) 『機密戦争日誌・上』〔大本営陸軍部戦争指導班：281-282〕, 1942年9月8日, 9日の記事を参照。

31) この史料は、『日中戦争 対中国情報戦資料・9』〔栗屋ほか：215-216〕が収めている。

32) 「河辺正三日誌」, 1944年2月23日や、沢本理吉郎「日本で観たビルマ軍の生立・その3」(防衛省防衛研究所戦史研究センター蔵, 史料番号は、南西・ビルマ・197)を参照。

33) 「河辺正三日誌」, 1944年4月10日。また、『いっさい夢にござ候』〔角田：72〕によると、河辺

が武藤に本間雅晴の再婚を相談し、結局、武藤の義妹の姉と再婚したのだという。

34) 彼らの席次については、例えば『陸軍現役将校同相当官実役停年名簿・昭和11年9月1日調』〔陸軍省1936:27-31〕を参照。

文献一覧

- 栗屋憲太郎・茶谷誠一編。2000。『日中戦争・対中国情報戦資料9』現代史料出版。
- 防衛庁防衛研修所戦史室。1974。『関東軍・2: 関特演・終戦時の対ソ戦』朝雲新聞社。
- 大本営陸軍部戦争指導班著、軍事史学会編。1998。『機密戦争日誌・上』錦正社。
- 遠藤三郎。1974。『日中十五年戦争と私: 国賊・赤の将軍と人はいふ』日中書林。
- NHKスペシャル取材班。2018。『戦慄の記録: インパール』岩波書店。
- 藤本弘道。1942。「第一線に活躍する将軍: 今村均、河辺正三両中将の横顔」『経国』9(11): 172-175。
- 古川隆久・劉傑・鈴木淳編。2007。『第百一師団長の日記: 伊東政喜中将の日中戦争』中央公論新社。
- 半藤一利。1988。『コンビの研究: 昭和史のなかの指揮官と参謀』文藝春秋。
- 秦郁彦。1961。『日中戦争史』河出書房新社。
- 畑俊六著、伊藤隆・原剛監修、軍事史学会編。2009。『元帥畑俊六回顧録』錦正社。
- 畑俊六著、伊藤隆・照沼康孝解説。1983。『陸軍・畑俊六日誌（続・現代史資料・4）』みすず書房。
- 林茂編。1971。『二・二六事件秘録・2』小学館。
- 日比野士朗。1943。『一軍人の生涯: 森田徹少将伝』日本書館。
- 広中一成。2018。『牟田口廉也: 「愚将」はいかにして生み出されたのか』星海社。
- 池谷禎治ほか。1966。「俺の骨をビルマに: 長江会・大将を偲ぶ」小川徳重編『河辺正三』（軍事研究臨時増刊）軍事研究社: 84-90。
- 石射猪太郎。1986。『外交官の一生』中央公論社。
- 石崎有信。1966。「正三叔父」小川徳重編『河辺正三』（軍事研究臨時増刊）軍事研究社: 59。
- 石崎潔信。1966。「秋の水」小川徳重編『河辺正三』（軍事研究臨時増刊）軍事研究社: 100, 108-109。
- 石崎申之。1966。「正三と虎四郎: 二人の兄弟愛物語」小川徳重編『河辺正三』（軍事研究臨時増刊）軍事研究社: 104-107。
- 神直道。1966。「将軍の歌」小川徳重編『河辺正三』（軍事研究臨時増刊）軍事研究社: 14-16。
- 亀井宏。1988。『昭和の天皇と東条英機』光人社。
- 金子定一。1956。「一軍人の知る中野正剛」『日本及日本人』7(4): 94-97。
- 閑院宮純仁。1966。『私の自叙伝』人物往来社。
- 桂鎮雄。1988。「盧溝橋事件 真犯人は中共だ」『文藝春秋』66(8): 128-136。
- 河辺浩。1966。「髭をはやしたハイカラさん: 実兄正三の人間性を語る」小川徳重編『河辺正三』（軍事研究臨時増刊）軍事研究社: 91-95。
- 河辺正三。1925。「欧米旅行中の雑感」『戦友』: 31-36。
- 。1947。「法廷証番号2479: 河辺正三宣誓供述書」(GHQ / SCAP 文書 (RG331))。
- 。1957。「序」塚本清『あゝ皇軍最後の日: 陸軍大将田中静彦伝』私家版: 1-3。
- 。1980。『日本陸軍精神教育史考』原書房。

- 河辺重三郎述，新木信之記，水木七郎寄．1966．「将軍の歌」小川徳重編『河辺正三』（軍事研究臨時増刊）軍事研究社：50-53．
- 小林龍夫・稲葉正夫・島田俊彦．1965．『現代史資料・12』みすず書房．
- 草地貞吾．1992．『将軍 32 人の風貌姿勢』光人社．
- 真崎甚三郎著，伊藤隆編．1981．『真崎甚三郎日記・昭和 7・8・9 年 1 月～昭和 10 年 2 月』山川出版社．
- ．1981．『真崎甚三郎日記・昭和 10 年 3 月～昭和 11 年 3 月』山川出版社．
- 松井太一郎．1958「故町尻量基陸軍中將を憶う」『町尻量基追悼録』町尻量基追悼録編纂委員会：179-181．
- 松浦正孝．2010．『「大東亜戦争」はなぜ起きたのか：汎アジア主義の政治経済史』名古屋大学出版会．
- 村田謹吾司会．1966．「ああ！！河辺正三：座談会」小川徳重編『河辺正三』（軍事研究臨時増刊）軍事研究社：60-80．
- 牟田口廉也．1940．「事変勃発当時の思出」『公民講座』189：59-71．
- 中島義男ほか．1991a．「教育総監部の話・座談会 6：典範令の歩み（続）・補充教育 1」『偕行』486：12-26．
- ．1991b．「教育総監部の話・座談会 7：「作戦要務令」と「歩兵操典」の制定」『偕行』487：5-12．
- ．1991c．「教育総監部の話・座談会 8：「歩兵操典」にみる戦闘法の変遷」『偕行』488：43-56．
- 額田坦．1982．『陸軍省人事局長の回想』芙蓉書房．
- 小川徳重編．1966．『河辺正三』（軍事研究臨時増刊）軍事研究社．
- 岡部直三郎．1982．『岡部直三郎の日記』芙蓉書房．
- 沖修二．1958．『山下奉文』山下奉文記念会．
- 陸軍習志野学校史編集委員会．1987．『陸軍習志野学校』陸軍習志野学校史編集委員会．
- 陸軍省．1936．『陸軍現役将校同相当官実役停年名簿・昭和 11 年 9 月 1 日調』偕行社．
- ロバート・ビュート．1970．『東条英機・上』時事通信社．
- 桜井正信．1966．「資料河辺正三伝」小川徳重編『河辺正三』（軍事研究臨時増刊）軍事研究社：54-58．
- 参謀本部．1987．『杉山メモ・下』原書房．
- 柴山兼四郎著，赤城毅彦・潮田良一郎編．2010．『元陸軍次官柴山兼四郎中將自叙伝』私家版．
- 清水盛明．1958．「町尻量基閣下を偲びて」『町尻量基追悼録』町尻量基追悼録編纂委員会：108-110．
- 清水規矩．1958．「町尻少將を憶う」『町尻量基追悼録』町尻量基追悼録編纂委員会：104-108．
- 周仏海著・蔡徳金編・村田忠禧訳．1992．『周仏海日記』みすず書房．
- 田垣住雄．1974．「いくさのほこり・2」『国防』23(3)：106-112．
- 武島良成．2014．「日本占領期ビルマにおける敵国資産の移譲問題：日本とバ・モオ政府の角逐」『東南アジア・歴史と文化』43：5-22．
- ．2016a．「日本のバ・モオ政府に対する譲歩の背景について」『歴史の理論と教育』145：39-53．
- ．2016b．「バ・モオ政府（ビルマ）の日本人顧問団」『東南アジア・歴史と文化』45：69-85．
- ．2018a．「バ・モオ政府（ビルマ）と日本軍の葛藤：バ・モオ暗殺未遂事件の処理をめぐって」（国際政治研究の先端 15）『国際政治』192：50-64．
- ．2018b．「（新刊書紹介）中野聡『東南アジア占領と日本人』：帝国・日本の解体」『東南アジ

ア・歴史と文化』47:123-127.

田崎末松. 1999.『評伝真崎甚三郎（新装版）』芙蓉書房出版.

寺平忠輔. 1966.「盧溝橋事件と河辺将軍」小川徳重編『河辺正三』（軍事研究臨時増刊）軍事研究社:22-30.

戸部良一ほか. 1984.『失敗の本質：日本軍の組織論的研究』ダイヤモンド社.

塚本清. 1957.『あゝ皇軍最後の日：陸軍大将田中静彦伝』日本出版協同.

角田房子. 1972.『いっさい夢にごさ候：本間雅晴中将伝』中央公論社.

臼井勝美・稲葉正夫. 1964.『現代史資料・9』みすず書房.

読売新聞社編. 1971.『昭和史の天皇・15』読売新聞社.

吉見義明・松野誠也編. 1997.『十五年戦争極秘資料集・補巻2（毒ガス関係資料Ⅱ）』不二出版.

国会図書館憲政資料室所蔵・真崎甚三郎関係文書（史料番号，史料名）

557.「河辺正三書簡」.

防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵史料（史料番号，史料名）

中央・作戦指導日記・266-270.「河辺正三日誌」.

南西・ビルマ・197.「日本で観たビルマ軍の生立・その3」.

文庫・依託・402.「支那事変記録・その3」.

JACAR（アジア歴史資料センター）データベース（レファレンスコード，年代，その中で使用した主な史料）

A14100304400. 1932.「陸軍軍需審議会令制定ノ件」.

B07090462700. 1919.「東条大尉以下五名海外出張ノ件」.

B12081121900. 1920.「瑞西航空界ノ現状」.

B13091435200. 1924.「外務省報第五三号」.

C01001266800. 1934.「軍隊内務書中改正ノ件」.

C01003140600. 1940.「満洲東部兵要地誌資料」.

C01003694900. 1941.「関東軍特別演習規定」.

C01006506000. 1931.「第2回世界動力会議報告書購入希望数調査ノ件」.

C03025187600. 1919.「独逸休戦提議ノ顛末」.

C04120143100. 1938.「治安維持関係事項」.

C08051941600. 1931.「独仏両国間軍備相互観ニ就テ」.

C09060209100. 1898.「明治三一年 参謀本部，教育総監部，憲兵司令部日報」.

- C11110925100. 1937. 「広安門事件ニ就テ」.
C11110926100. 1937. 「支那駐屯軍命令」.
C11110961400. 1937. 「機密作戦日誌」.
C15120063800. 1927. 「参謀本部歴史」.
C15120064900. 1929. 「参謀本部歴史」.
C15120158000. 1930. 「学業報告」.
C15120230800. 1921. 「海外差遣者報告目録・編制之部」.
C15120233300. 1923. 「海外差遣者報告目録・制度之部」.
C15120233500. 1923. 「海外差遣者報告目録・編制之部」.
C15120234300. 1923. 「海外差遣者報告目録・雑之部」.